

学 位 論 文 要 旨

氏 名 大 門 秀 司

題 目 動的学校画の基礎的研究および学校現場への臨床的応用の可能性

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本論文では、いじめや不登校、自殺など多くの問題を抱える学校現場において、動的学校画を子供の心を理解するための方法や人間関係をアセスメントする方法として活用するために、小学生における動的学校画の発達的特徴、動的学校画の描画特徴と学校適応との関連および教師と心理専門職の描画を見る視点の違いを明らかにする基礎的研究と、学校現場において学級担任が教育相談に動的学校画を用いる臨床的研究を進めた。

第1章においては、学校現場で描画法を適用することの有効性について触れながら、唯一学校をテーマにした描画法である動的学校画について、これまでの先行研究を概観し、日本において動的学校画研究の蓄積が少ないことを指摘した。

第2章・研究1においては、小学生が描く動的学校画の描画特徴の発達の変化について、これまで十分に研究されてこなかった低学年の描画特徴もあわせて検討した。予備調査においては、低学年においても教示が伝わる工夫について検証し、動的学校画チェックリストについても検討した。低学年においては、グラウンドなど校舎外で先生や友達と遊ぶ様子を多く描いた。中学年においては、学習場面が多く描かれ、描かれる友達の数が低・高学年に比べ多かった。高学年においては、校舎内で友達と話をするなど静かな活動の絵が多く、自己像と友達像の距離が近く描かれるという特徴がみられた。小学校低学年も含めた動的学校画の描画特徴が明らかにされた。

第3章・研究2においては、小学校3校の600名を対象として動的学校画、学級満足度尺度、児童用メンタルヘルスチェックリストのストレス症状尺度を実施し、低学年、中学年、高学年ごとに分析を行って小学生が描く動的学校画の描画特徴と学校適応の関連について検討した。適応群においては、全体的印象が明るいことや絵のその後の物語がポジティブな内容であること、表情が親しい・楽しいものが多いことなどが明らかになった。一方、不適応群においては、全体的印象が暗く、欠けることがなく描かれた身体像が少なかった。

第4章・研究3においては、動的学校画を小学校教師20名、心理専門職25名に提示し、絵のどこに着目するのか、着目した理由は何か、どのような対応を考えるのかについて、その違いや共通点を適応群、

課題群、不適応群の動的学校画ごとに分析を行った。心理専門職は不適応群の動的学校画を見た際に、教師に比べ「気になる」と答えた人が多いという結果であり、心理専門職の方がより不適応的な側面を見いだしやすいと考えられた。また、心理専門職は描画の全体的印象や人物像の関係性に着目し、教師は人物像の表情など見て分かりやすい情報に目が行きやすいという結果であった。対応方法においては、教師は具体的ですぐに実践に活かせる方法を考えることに特徴がみられ、心理専門職は、教師と比較してより描画者の子供が訴えようとしているものに共感し、取り巻く環境や様々な事態を想定して対応するところに特徴がみられた。学校現場において動的学校画を媒介として教師と心理専門職が連携する際の基礎的資料を得た。

第5章・研究4においては、学級担任が動的学校画を教育相談に用いた際の有効性や課題について明らかにした。事例として小学校6年生2人を対象として、動的学校画を活用した教育相談の分析を行った。有効な点として、1)話のきっかけとして活用しやすい、2)学校生活の中から心に残ったことを選んで描くので、どのようなことを楽しんだり悩んだりしているのかが理解しやすい、3)教師と子供、子供同士の間人間関係を把握しやすく、絵に描かれた表情やPDIなどから教師や友達への思いなどが読み取りやすいなど心理アセスメントとしての有効性が挙げられた。一方、課題として、1)絵を描くことが苦手な子供にとっては、何を描くのが悩むこととなり心理的負担が大きくなる可能性がある、2)行動観察やアンケートなど他のアセスメント法と併用することでより有効に活用することができる、3)養護教諭やスクールカウンセラーなどとの連携が必要であるなどがあげられた。

第6章・研究5においては、小学校24学級の教師を対象に動的学校画を教育相談に用いることを試み、学級担任から見た動的学校画の有効性と課題、活用のアイデアについて明らかにした。9割の教員が、動的学校画を用いた教育相談が子供理解に役立ったと答えた。また、動的学校画を用いて良かった点として最も多かったのが「友達関係の把握」であり、次に「日常生活の把握」であった。一方、気になった点として最も多かったのは「絵を描けない子供への心理的負担」であり、次に「時間への対応」であった。活用のアイデアとして、「定期的な実施」、「研修会での活用」などが挙げられた。学級担任から見た、動的学校画を教育相談で用いる有効性や課題が明らかとなった。

第7章においては、本論文において得られた知見とその意義について述べ、最後に本論文における課題を述べた。